患者支援アプリ 続々

症状記録から医学的助言付きまで

患者の生活や治療を助けるスマートフォン用のアプリケーションが続々登場している。日々の健康状態を記録する簡単なものから、医師の問診と同様にスマホが医学的な根拠に基づく助言をくれる本格的なものまで、タイプはさまざま。アプリを公的医療保険が使える医療機器として広げていこうという動きもあり「医療の未来を変えられる」と関係者の鼻息は荒い。【清水健二、写真も】

指定難病向けも

遺伝性血管性浮腫（HAE）という国の指定難病がある。顔や手足、消化器などの突然の腫れや痛みの発作に繰り返し襲われる病気で、のどが腫れて気管がふさがったりすると命に関わる。国内の患者数は推計約2500人、確定診断がつき治療を受けている人は450人程度しかいないとされる希少疾患だ。

この病気の新薬を開発中の「シャイアー・ジャパン」（東京都）が5月、患者の症状を記録するスマホアプリ「HAEノート」の無料提供を始めた。

腫れなどが出たら、患者らがカメラで撮影し、部位や痛みの強さなどを手順に沿って記録する。写真やグラフで過去の発作や回数を簡単に振り返ることができるほか、HAEを解説する動画もすぐに再生できるようになっており、かかりつけでない病院に救急搬送された場合などに説明の助けになる。

HAEに詳しい埼友草加病院（埼玉県草加市）の大沢勲院長によると、多くの患者は症状が重くなってから来院するため、初期の症状や発作の正確な頻度を医師は把握しづらかったという。「このアプリがあれば、発作のきっかけをつかめる可能性があり、予防も含めた新たな治療方針が見えてくるかもしれない」と期待する。

患者側も聞き取り調査に協力するなどして、開発の一端を担った。患者会「NPO法人HAEジャパン」の今村幸恵事務局長は「認知度が低い病気への周囲の誤解に苦しみ孤立しがちな患者の思いを反映してもらえた。治療環境がもっと整い、まだ診断のついていない患者にも医療の手が届くとうれしい」と話す。

体調を「見える化」

シャイアーとアプリを共同開発した「ウェルビー」（東京都）は、これまでに約15本の疾患別アプリを、自社オリジナルや製薬会社との共同でリリースしている。

高血圧や糖尿病など患者の多い病気から、がん、関節リウマチ、統合失調症、希少疾患の脊髄性筋萎縮症（SMA）まで、対象は幅広い。いずれも医療機関と情報共有し、医師が把握しにくい日々の体調や生活の質などの「見える化」を進めるツールだ。

同社によると、こうした患者支援のアプリは、ここ1～2年で急増した。比木武社長は、①スマホの普及②IT活用を進めたい医療機関側の思惑③医薬品とアプリのセットで患者支援に取り組む製薬企業側の戦略――という要素の重なりが背景にあると解説する。既に全国3500以上の医療機関がアプリを導入し、郵便局のネットワークを使った高齢者の見守りなどでの活用も計画中という。

「医療機器」として

アプリの機能をさらに高め、医学的に治療効果が認められた医療機器として普及させようという動きもある。2014年に旧薬事法が医薬品医療機器法に改められた際、単体のソフトウエアも医療機器の承認が受けられるようになったからだ。

創業4年の「キュア・アップ」（同）は、ニコチン依存症治療用のアプリを慶応大と開発し、現在、承認に向けた最終段階の治験に入っている。喫煙状況、喫煙衝動、服薬状況などを日々記録するだけでなく、データに基づき医師の指導と同じような医学的に妥当ある助言をアプリがくれる、という売りだ。

医師でもある大石太社長は「エビデンス（医学的根拠）のあるアプリによは、高い効果が期待できる上に、副作用の心配もない。開発費は薬よりずっと安く、医療費抑制の大きな力になる」と展望する。禁煙に続き、脂質異常など生活習慣病のアプリも開発中だ。

患者支援や健康管理のアプリの入手方法

①スマホの「App Store」や「Playストア」を開く

②「糖尿病」「血圧　記録」などのキーワードで検索して、使いたいアプリを探す

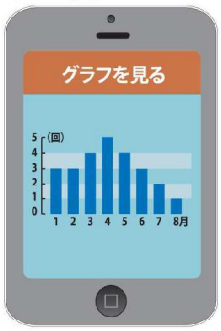
③「入手」や「インストール」を押す

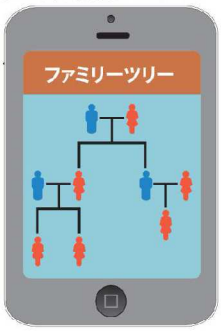
※有料のものもある。疾患別のアプリは、使う前にかかりつけ医に相談した方がいい

アプリ「HAEノート」の機能と特徴 ※イラストはイメージ

症状の記録
カメラと画面タップで簡単に

記録の確認
グラフやカレンダーで「見える化」



HAEの説明などの動画
周囲の理解を助ける

ファミリーツリー（家系図）作成
家族・親族の診断状況を把握し、早期治療につなげる